



# 見聞録 ムエタイ 古式

伊藤武  
*ito takeshi*



新泉社



## 1 巨象との闘争 バジヨン・チャーン・サーン ————— 9

- ❖ ムエタイの来た道 9
- ❖ 『ラーマキエン』の魔法のことは 10
- ❖ チャイヤー拳法 VS コーラート拳法 15

## 2 戦士の護符 ヤン・ヨーテイー ————— 21

- ❖ チャイ・ナーム、チャイ・ナーム（水の心、水の心） 21
- ❖ 痛みを感じているヒマがない？ 23
- ❖ アーユルヴェーダとの接点 28

## 3 三歩制圧 ヤーン・サム・クム ————— 31

- ❖ ムエタイの神話 31
- ❖ 密教的なヨーガ 34
- ❖ パフユツ（シヤム拳法）のルーツ？ 39

## 4 矢を射るラーマ プララーム・プラン・ソーン ————— 41

- ❖ 謎にみちたシヤム武術史 41
- ❖ 戦士の食卓 41
- ❖ ナーヤル — 神王の軍団 45
- ❖ ソワンナブーム・ボクシング 49

5 猿を捕る夜叉 クンヤツ・ジヤブ・リン ————— 53

◆リンロム、または猴拳 こうけん 53 ◆「ムエタイ五百年」の歴史 56 ◆クラビー・クラボーン

6 刀をふるう侍 サムーレイ・パウヤウ・カータナー ————— 65

◆ヒーローはおれだ 65 ◆ナレースワン伝説 67  
◆シヤムと日本をつなぐ人々 74

7 師なる構え タークー ————— 77

◆チャイヤラット道場 77 ◆最初のレッスン 84 ◆基本の構え 85

8 武器の精神 チャイ・アーウツ ————— 91

◆ドリアン拳法 91 ◆入門式 95 ◆シヤム武術の正統 96

9 乙女をさらう夜叉 クン・ヤツ・パー・ナーン ————— 103

◆チャイヤー拳法のはじまり 103 ◆宗師(グランドマスター)ケット・シーヤーパイ  
◆サムーレイの技? 109 ◆ヤマダ・ナガマサ 114

10 魚の互え歯 たが ば サラブ・ファン・プラー ————— 117

◆首投げ? 117 ◆母技(メーマイ) 121 ◆体さばきの基本 124

11 風に吹かれし風車 カンガン・トン・ロム ————— 129

◆道場やぶり 129 ◆〈須弥山しゅみざんの持ち上げ〉(ヨツ・カオ・プラスチック) 131  
◆〈象牙ぞうげ砕き〉(ハツ・ングワン・アイヤラー) 135 ◆小をもつて大を制す 138

12 金剛石柱の破砕 ハツ・ラック・ベツ ————— 141

◆トニー・ジャアのアクション 141 ◆〈杭打ち〉(パツ・ルート・トイ) 143  
◆〈尾おしを捻ねじられた竜〉(ナーガ・ビツ・ハーン) 143  
◆〈蛇行剣へびぎんぎんをうがつイナオ人〉(イノウ・タエン・クリツ) 147 ◆気持ちをかめる 147

13 おしっこ洩れそ タウィン・イオ ————— 153

◆基礎訓練 153 ◆〈槍やりを擲なげるジヤワ人〉(チャワ・サツ・ホック) 157  
◆〈巢ねから覗く鳥〉(バクシャヤー・ワエ・ラン) 160 ◆〈魔象の首を折る〉(ハツ・コー・エラワン) 160

14 森を歩むラーマ プララム・デアン・ドン ————— 165

◆まわし蹴りの謎 165 ◆前蹴りの基本 166 ◆〈柱を支えるモン人〉(マオン・ヤン・ラック) 168  
◆微笑みの背後に潜むもの 171 ◆へはね返される光輝ひかり(ウイールン・ホック・クラブ) 173

15 尾をうち振る龍 マンコーン・ファード・ハーン 177

- ◇尾をうち振る鰐(ジャラケー・ファード・ハーン) 177
- ◇基礎訓練「尾を断つ龍」(マンコーン・ラウン・ハーン) 180
- ◇恐竜の武術? 182
- ◇ふりむく鹿(クワーン・リエウ・ラン) 186

16 世界を拓く拳 マツ・ピアド・ローク 191

- ◇ムエタイのパンチ 191
- ◇へ石突きを撥ねあげる翁(ター・テン・カム・ファーツ) 192
- ◇消灯(ダブ・チャワラ) 194
- ◇ムエファラン(西洋拳法)登場 196

17 寺を掃く沙弥 テン・クワツ・ワット 205

- ◇御前試合の顛末 205
- ◇古式ムエタイの完成 210
- ◇植民地と武術 211

18 瓜の飾り切り ファン・ルーク・ブアツ 217

- ◇子技(ルークマイ) 217
- ◇軸脚へのカウンター 219
- ◇肘打ち 222
- ◇ムエの国技化 226

19 鶏をつつく鴉 カー・ジグ・カイ 229

- ◇ビルマとの対抗戦 229
- ◇現代ムエタイの完成——シンプルゆえの強さ 231
- ◇しかし足、拳にかなわず 236

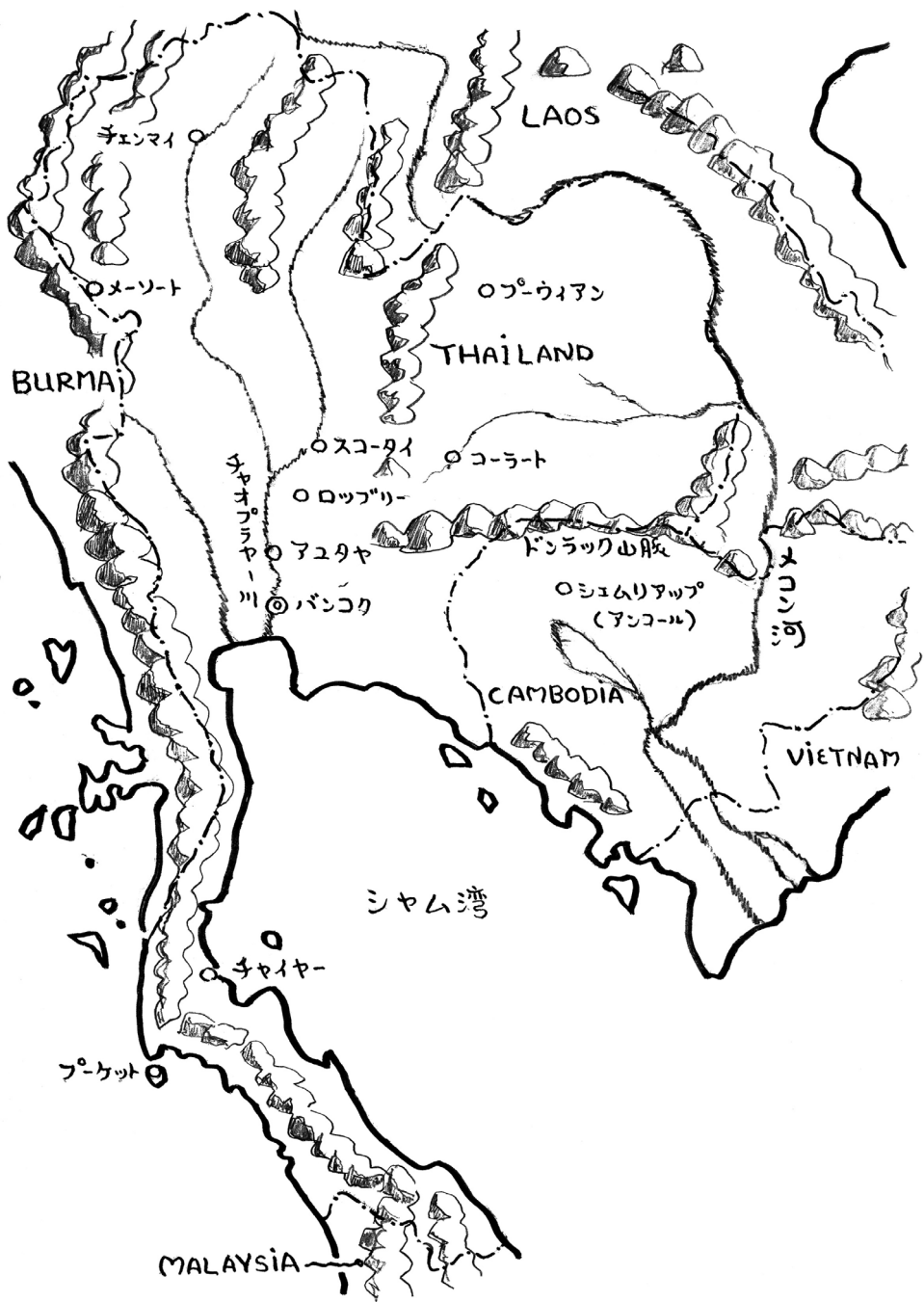
20 薬を碾く仙人 ルウシー・ボド・ヤー 239

- ◇チャイヤー拳法のその後 239
- ◇なぞの仙人たち 241
- ◇からだの秘密 245
- ◇ムエタイの「いやし」 248

21 空飛ぶハヌマーン ハヌマーン・ヒエン 251

- ◇ムエタイは、どこから来たのか? 251
- ◇幽体離脱現象 251
- ◇跳躍するハヌマーン 252
- ◇ハヌマーンの法 254
- ◇では、ムエタイはインドから来たのか? 257
- ◇ハヌマーンの正体 261

参考文献 265  
あとがき 267



# 1 巨象との闘争 パジョン・チャーニン・サーン

「キエイ！」

寺院の境内に、裂帛れっぱくの気合がとどろく。

トニー・ジャー演じる主人公ティンが、呪文のような言葉を唱えながら、全身を鞭のように使って、宙に舞い、地を這いながら、古式ムエタイの型を演じていく……。

(タイ映画『マッハ……』より)

## ❖ ムエタイの来た道

筆者は武術好きの、もの書きである。

一九七九年から八〇年代にかけて、つまり二十代のほとんどを、いまでいうバックパッカーとしてアジア各地を放浪することで過ごしてきた。インドのカラリパヤットやタイのシャム拳法ほか、多くの古武術の道場にしばし身を寄せたこともある(ちなみに「シャム」とは現在のタイの旧名である。以下、文脈に応じてタイとシャムが混在するが読者諸賢においては諒とされたい)。

おかげで、武術誌からアジアの伝統武術を紹介する連載をいただいた(本書はその「古式ムエタイ編」を一冊にまとめたものである)。まずは序文を兼ねて、

——ムエタイは、どこから来たのか？  
そんな話から始めたい。

#### ◆『ラーマキエン』の魔法のことば

タイに古い記録はない。あるのは伝説だ。この国の公式文書の多くが、ビルマ（現ミャンマー）との戦争（一七六七年）のさいに焼失したからだ。ムエタイも曖昧模稜たる伝説から発生した。そしてもうひとつ、『ラーマキエン』からも。これはインド叙事詩『ラーマヤナ』のタイ語版である。

ヴィシュヌ、宇宙の維持をつかさどる神。

そのヴィシュヌが、コーサラ国の王子ラーマとして生を受ける。

しかし、ラーマは王位継承の陰謀にまきこまれて、

妻のシーターとともに森の奥に追放される。

シーターは、ランカー（スリランカ）の魔王ラーヴァナにさらわれる。

ラーマは、ハヌマーンを将軍とする猿の大軍を味方にひきつれて、

ランカーに攻め入り、魔王と熾烈な戦いをくりひろげる。

そして、魔王を殲してシーターを救け出す。

ラーマはコーサラ国の都アヨーディヤーに凱旋し、

王位について、王国に平和と繁栄をもたらす。

この物語は、タイの人びとの血肉に溶けている。バンコクで観光客が目にする古典舞踊は、すべて『ラーマキ

エン』といってよい。ムエタイも例外ではない。

たとえば、映画『マツハ……』のワンシーン。主人公が、なにやら唱えながら、型らしきものを演武する。

彼はなんと云っているのか？

以下は、筆者がタイ語の辞書をくりながら、訳したものである（「」内は補足）。

戦士の護符、尾をうち振る鱈

巨象（エラワン）と闘う「猿神ハヌマーン」

ハヌマーンは指環を「シーター姫に」捧ぐ

馬は跳ね、鹿はふりむき、その身に勇気満ちゆく

ヘラ龍の貌をうがち、両軍戦士入り乱れ、雄象は興奮す

「ハヌマーンは」かの象の牙を砕き、鉤をもって魚を釣る

鹿は首をまわして「角で割き」、天神は頭頂に雷を撃つ

波は岸辺に寄せ、鯉は切株に隠る

夜叉は猿（ハヌマーン）を捕えんとし、

「ハヌマーンは」魔象エラワンの首を折る

蛇が蜥蜴を逐う

光が射し、モントー妃は膝にすわる

槍を突き、勁き風の剣を断ち、軍兵を鎮める

神秘的な戦争詩のようだ。



図 1-1 シアム拳法（シラム・パフユツ SIAM PAHU YUTH）の技の一例

- ①戦士の護符：背後からつかみかかる敵に対するバック・エルボーのワンツー。
- ②尾をうち振る鱈：敵パンチに対するバックスピン・キック。古式では、手を地に着けて、かかとをふり上げる。
- ③巨象との闘争：パンチとキックを同時に放つ。
- ④指環を捧ぐハヌマーン：敵のパンチをダッキングしてかわし、両手でアッパーカット。
- ⑤跳ねる馬：前蹴り。古式では、遠間から放つ前蹴りは、まわし蹴り以上に重視されている。
- ⑥ふりむく鹿：バックスピン・キック。前の「跳ねる馬」の後につづけて使用されることが多い。
- ⑦身に満ちる勇氣：遠間から飛び込んでのスウィング・パンチ。両手同時にスウィングするやりかたもある。
- ⑧ヘラ龍の貌の刺突：フックと膝蹴りを同時に放つ。これを修得してから「巨象との闘争」に進むとよい。
- ⑨入り乱れる戦士：肘を水平にふり、もう一方の肘を縦に突き出す。攻撃よりも、防御のための技。
- ⑩興奮した雄象：バック・エルボーの一種だが、肘は「象の鼻のように」垂直にふり下ろされる。
- ⑪象牙砕き：敵の蹴り足を腕で捕り、腿の急所や脚の付け根に肘を落として、脚そのものを破壊する。
- ⑫魚を釣る鈎：敵の脇への膝まわし蹴り。敵が身を寄せて攻撃してきたときの防御にも用いる。
- ⑬首をまわす鹿：敵に抱え込まれたときに用いる技。膝で敵のバランスを崩し、顔面に肘をふり入れる。
- ⑭頭頂に雷を撃つ天神：敵の両手を一方の手を用いて封じて跳躍。頭頂に肘を撃ち落とす。
- ⑮岸辺に寄せる波：パンチに対するカウンター技。身を回転させて敵との間をつぶし、ガードの開いた胸や脇に肘を突き入れる。
- ⑯切株に隠れる鯉：敵のパンチをサイドステップしてかわし、膝と同じ側の拳または肘を同時に突き入れる。
- ⑰猿を捕る夜叉：防御の基本。敵は突き、蹴り、肘のコンビネーションで攻撃。我はそれらを巧みに防御する。
- ⑱魔象の首を折る：敵の首を捕って膝蹴りにつなぐ。古式では、跳躍して頭頂に肘、顎に膝を入れるかたちもある。
- ⑲蜥蜴を逐う蛇：図ではわかりにくいだが、左右の膝を交互に蹴り出す技で、今日のムエタイでもよく使用されている。
- ⑳射光：膝を垂直に突き上げる。ふつうは首相撲と併用。これも今日のムエタイで頻りに使用されている。
- ㉑膝にすわるモントー妃：敵のまわし蹴りを、背を向け、跳躍することによってかわし、顔面に肘をふる。
- ㉒槍突：フロント・エルボー、すなわち肘を垂直に突き出す肘打ちの基本形。攻撃や防御に多用される。
- ㉓動き風剣の破壊：拳と肘の連打。敵拳を手で払い、ストレート。歩を進めて肘。敵の腕を捕り、引くようにして肘を入れると効果的。
- ㉔鎮められた軍兵：膝と肘を同時に撃つ。「切株に隠れる鯉」に似るが、この場合の肘は下からふり上げる。



が、文のひとつひとつが『ラーマキエン』の場面場面を截りとり、いわば小見出しになっている。エラワン、ハヌマーン、シーター、ラーマストーンは、『ラーマキエン』の登場人物である。

と同時に、これはシャム拳法の技名にもなっている。図1-1はそのフロー図である（アクションを強調した映画のそれとは異なる）。

①の〈戦士の護符〉（ヤン・ヨーティー）。これは背後から襲いかかる敵を肘で迎撃する技である。

②の〈尾をうち振る鱈〉（ジャラケー・ファード・ハーン）と⑥の〈ふりむく鹿〉（クワン・リエウ・ラン）は、後ろまわし蹴り。

④の〈指環を捧ぐハヌマーン〉（ハヌマーン・タワイ・ウエーン）は、両手によるダブル・アッパーカット。同名のシーンは、『ラーマキエン』のハイライトのひとつだ。空を飛ぶことのできるハヌマーンはランカーにひとつ飛びして、魔王に囚われたシーター姫に会う。そして、おのれがラーマの友人であることを告げ、彼女を勇気づけるのだ。一幅の絵が目には浮かぶ。姫の前にひざまずき、ラーマの使者であることを証明する指環を、両手に捧げもつハヌマーン……。

とまれ、こうした名前つけられた古典技法が、百ばかりある。

順序に、とくに決まりはない。道場ごとに弟子たちが覚えやすいように分類・編成されている。図1-1のよう順に並べると、『ラーマキエン』のストーリーとあいまって、イメージしやすくなる。これらは対人稽古で身につけるが、一人稽古として連続して行くと、中国拳法の套路のようなものにもなる。

天かける神ハヌマーンにちなんだ技には、跳躍するものが多い。

たとえば、シーター姫に会うために〈ランカーに渡るハヌマーン〉（ハヌマーン・カン・ロンカー）。対手がキックする。その瞬間、宙に身を騰らせ、敵の蹴り脚を踏み台にして、顔面に膝を飛ばす。ここにはないが、映画でティンがひんばんに見せた技のひとつである。また前述の「指環を捧ぐハヌマーン」にも、ダブル・アッパー

カットに跳躍しての両膝蹴りを併せるかたちがある。

女性も活躍する。敵がまわし蹴りする。その蹴り脚に背を向け、ジャンプする。と、相手の膝にすわるようなかっこうになる。そのすがたから、顔面に肘鉄をお見舞いする——というのが②の〈膝にすわるモントー妃〉（ナン・モントー・ヌアン・タク）。なおモントーは、魔王トサカン（インドではラーヴァナ）の妃である。

バリエーションに、「卓にすわるモントー妃」（ナン・モントー・ヌアン・タエン）がある。敵の蹴りや突きを身を百八十度ひるがえしてかわし、後ろに跳んで、敵の顔や胸に尻をぶつける。うまく決まれば、

「敵は仰向けに倒れ、頭を地面に打ちつけて失神するであろう」

と伝書にはあるが、美妃のお尻であれば、たしかにノックアウトされそうだ。

シャム拳法は、ラーマ神の化身を自認するラーマ王の宮廷で研究された。

国民に武道を奨励したラーマ五世（在位一八六八〜一九一〇年）は、この官製拳法をおさめた武人を全国の都市に派遣した。かれらは地方に根を下ろし、土地の者に拳法を教えた。それが土着の格闘技とミックスし、さまざまな流派が生まれていった。

そのうち、もつとも知られたものが、南部のムエチャイヤ（チャイヤ拳法）と東北地方のムエコーラート（コーラート拳法）である（図1-2）。

### ◆チャイヤ拳法 vs コーラート拳法

「キエイ！」

学舎まなびやの庭に、裂帛の気合がとどろく。

鍛え上げられた拳士たちが、全身を鞭のように使って、宙に舞い、地を這いながら、熾烈な闘いをくり広げて

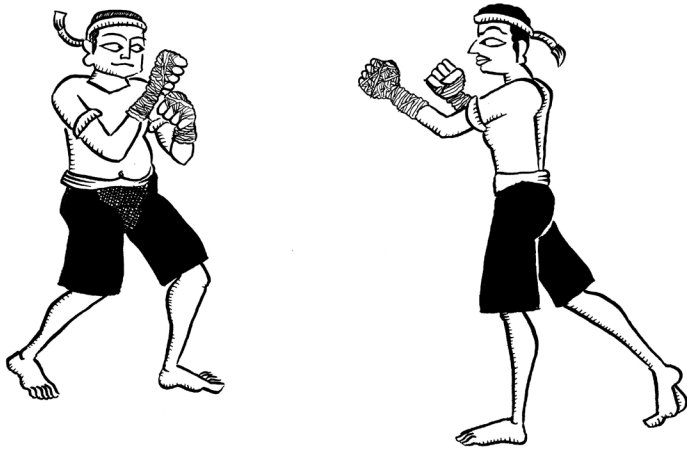


図 1-2 チャイヤー拳法とコーラート拳法

当時の選手は、上半身裸に木綿のパンツをはき、お守りの鉢巻（モンコン）と腕輪（パーチエツ）をつけ、拳に木綿の紐（チューア）を巻いて戦った。ルールは「なんでもあり」。股間攻撃もOKだから、金的に椰子殻や樹皮でつくったカップをかぶせ、その上に小さなクッションをあてがい、越中フンドシのような下帯を締めて固定した。

●チャイヤー拳法（左）：マレー半島のチャイヤー地方に起こった流派。腰を落とし、半身に構える。蹴りや突きは振りきらない。太極拳の撃ちかたに似ている。

●コーラート拳法（右）：東北のイサーン地方で発達した流派。体重の大部分を前足に乗せ、腹や胸を正面に向け、ほとんど棒立ちになって構える。この流派では、蹴りも突きも振りきる。現在のムエタイのまわし蹴りでは、空振りするとくると一回転するが、これはコーラート式の蹴りである。こんにちもイサーン地方は、多くの名選手を輩出することで有名。

若者に腰をぶつけ、上体をひねった。魔王がシーター姫を拉致する場面になんだ（乙女をさらう夜叉）（クン・ヤツ・パー・ナン）という技だ。日本でいう一本背負いのようなかたちになる。若者の体は宙を舞って、地面にたたきつけられた。

（いや……だめだ）と、ポーンは心中で首をふつていた。

（どう攻めても、投げられてしまう）心と心の戦いであつた。ふたりは思念の拳をすでに幾度も交えていた。校庭を埋めつくす観衆も、それを察してか、固唾を呑んで静まりかえっている。指が自由に使えるから、投げ技や関節技もある。

そして、拳卿プロンがこの年齢になるまで第一線で戦えたのも、自分からは仕掛けず、相手の攻撃の力を何倍にもして撥ねかえすこれらの技にすぐれ

ゆく……。

一九二一年、ときの国王ラーマ六世が、拳法試合の定期興行を決定した。入場料を武器購入の資金に当てるためである。シャムもまきこまれた第一次大戦が終わってまだ間もないころ。世界は不穏な空気につつまれていた。第一回目は、バンコクの王立薔薇苑カレッジのサッカー・グラウンドで行われた。シャム一の拳士を決めるトーナメントである。

決勝戦。グラウンドに石灰で線を引いただけの闘技場に進みでは――

こなた、チャイヤー拳法のプロン・チャムノーントーン。

かなた、コーラート拳法のポーン・パーツサポーツ。

戦法も容姿もまったく対照的なふたりであつた。

ポーンは二十二歳。鋼鉄のような軀からだをしている。得意のパンチと脛すねキックで、これまでKOの山を築いてきた。対するプロンは、鞆たもをおもわせる体をしている。チャイヤー拳法は肘、膝を主とする流派であるが、プロンはそれとはべつの武器で対手を倒してきた。

そして彼はこのとき、なんと五十歳！ 前王ラーマ五世にその技倆を愛され、平民から貴族に列せられていた。いわば人間国宝である。しかも彼は若いころ、五世の御前でポーンの父親を二分でやぶっている。

因縁試合だつたわけだ。しかし――

アグレッシブなファイトを常とする若者が動かない。いや、動けないのだ。

ポーンは、流派の構えであるほとんど棒立ちの前傾姿勢で立ちながら、じりじりと間をつめてはいく。が、あるところまで来ると、ぱつと後ろに跳びすぎた。まるで、目に見えぬバリエーションに弾かれたように。

ぎやくに拳卿けんきやう（ムエン・ムエ）プロンは、やわらかく腰を落とした構えで、じわじわと圧おさしてくる。

ポーンの拳がブンとうなりを上げる。拳卿はそれをかわして腕を捕るや、巻きこむように身を寄せる。そして

ていたからであった。

彼の心中はしんと冴えわたっていた。地面のわずかな凸凹が手に取るようにわかった。土が微細な石を嚙んでいた。それがなぜか気に触った。

「！」

その瞬間に生じたわずかな思念のほころびを、若者は見逃さなかった。黒い鞭のように、右脚が拳卿の胴をめぐらして疾った。

プロンは、右足を一步踏みこみ、上体を左にひねり、右掌で蹴り脚の膝の上を押す。と、蹴りは無力化してしまふ。その脚を左腕でからめとつてしまふ。

捕った脚の腿の急所に肘を打ちおとすと、脚を破壊することができる。(象牙砕き)(ハツ・ングワン・アイヤラー)という技である(図1-1の⑩)。膝は砕け、ポーンは生涯足を引きずって歩くことになる。

が、プロンはそんな酷なことはしない。捕った脚を肩にかつぐように持ち上げてやるだけでいいのだ。それだけで相手の体は後方に投げ出され、後頭部を地面に打ちつけてしまふ。ポーンの父をやぶつたのが、この技であった。

そのかたちは、これまでもう何万回とくり返してきたものだ。拳卿の体が考えるより早く動いた。しかし、若者の軀はもつと迅く動いた。ガードの開いたプロンのこめかみに、左拳のスウィングをめり込ませていた。

蹴りと反対側の手のパンチを同時に出す。(巨象との闘争)(バジョン・チャン・サーン)である(図1-1の③)。蹴りにも拳にも同時に力をこめることなど、ほとんど不可能といつてよい。体の使いかたが違うのだ。しかし、

父のあだを討つにはこれしかない。彼もまた、いつか拳卿プロンと仕合う(しあ)うときのことを念(おも)い、何十万回と稽古し、ようやくコツを会得した。そして、使うタイミングをずつと計っていたのだ。

拳卿は、それこそ巨象のようにくずおれた。

若者は地に臥した老雄の前にひざまずき、頭(こぶ)をふかく垂れて合掌した。

観衆の興奮が瞬時に沸騰した。なだれを打つたように闘技場に殺到し、けが人も出た。

そのため、第二回目以降の拳法試合では、リングが用いられることとなった。しかし、ムエカッチューアの「なんでもあり」ルールであったため、命を落とす拳士が続出した。

一九二九年、政府はグラブの着用を義務づけるようになる。ルールはその後、国際式ボクシングを参考にして、少しずつ整えられていく。手指が使えなくなったことにもない、投げや関節技は早くに廃されるが、頭突きはかなり後まで残った。

一九三九年、シヤムは国号をタイに改称。シヤムの拳法は、ムエタイ(タイのボクシング)とよばれることになる。